

# 方言教育学は成立するか

Why, how and to whom should the dialects be taught?

山田 敏弘

YAMADA Toshihiro

## 1. はじめに～誰が「方言」を学ぶのか

本稿では、地域的に話者の存在に偏りのあることは、すなわち一般的に方言と呼ばれている言語体系を学ぶことの意義について考える。

「日本語」を学ぶことを対象とする点で、日本語教育や国語教育と比較しながら、本稿の主題を明確にしておかなければならない。そのために、まず、だれが「方言」を学ぶかという点を確認しておく。一般に、国語は母語話者を学習者として想定し、日本語を学習するのは非母語話者が想定されるが、これに対し、方言は多様な学習が想定される。

母語 世代	同一方言	異方言	非日本語
同世代			
異世代			

表1 想定される方言学習者

表1では、横に共時的な言語の差異を、縦に通時的な違いをとった。同一方言の同世代話者間での方言使用をもっとも違いの少ない言語使用状況であるとすれば、そこから母語の異なりが大きくなる場合であれ、世代的に離れる場合であれ、離れば離れるほど、より目標となる方言への近づきやすさ (accessibility) は小さくなる<sup>1</sup>。逆に言えば、「日本語教育」のような外国語学習と異なる、近づきやすさの段階性が方言学習の場合には顕著に存在するということである<sup>2</sup>。

このような分類によって分けられた学習者は、それぞれに異なる意図によってある方言を学ぶことになる。同一方言の異世代話者、より具体的にはより若い世代が年配世代の使用している (いた)<sup>3</sup>方言を習得以外に意図的に学ぶことと、ある方言を異方言あるいは異言語母語話者が学ぶのとは、

<sup>1</sup> 表1は非常に単純化したモデルであることは言うまでもない。

たとえば、共時的に、同一方言か異方言かという境界は明確ではない。岐阜県美濃地方の方言と愛知尾張地方の方言は多くの共通点を含むが、この差異を岐阜県美濃地方方言と津軽方言との差と同じように捉えることはできない。段階性のあるものである。逆に、「同一方言」がどの範囲まで認めうるかも回答は困難である。

さらに世代については、右に行けば行くほど、世代差は大きな要因とはならない可能性が高い。

<sup>2</sup> もちろん、韓国語話者は、その構造的・語彙的な近さにより、英語話者よりも平均値として日本語を学びやすい傾向にあることは言うまでもない。また、異言語としての外国語は、確かに日本語とは異なるが、話者自身が二言語併用状態にあることなども考えなければならない。

<sup>3</sup> より若い世代の方言を、学ぶということがないわけではなからう。たとえば、名古屋方言の新しい「～がね」という言い方を、「～がね」を用いる年配世代が、たとえば若い学生たちにウケようとして用いるなどは、あり得なくはない。

その動機も異なれば、当然、手法も違ってくる。この点について第3節で詳しく見ていく。

## 2. 「言語」か「方言」か～諸外国における言語(方言)認定基準との比較を通じて

研究の俎上に載せるために、「言語」と「方言」の違いを確実にしておく必要がある。両者を客観的に区別する明確な指標は存在しない。ここでは『言語学大辞典』の記述を参考に、「言語」と「方言」とを分ける要因を考え、同時に、諸外国での「言語」と「方言」との扱われ方の違いを、特に研究の進んでいるロマンス語圏を中心にしておく。

### 2.1 言語内的要因と言語外的要因による「方言」と「言語」の区別

『言語学大辞典』によると、「方言」は他の「方言」に対し、音対応に支えられた親族関係をもつことのみならず、「その上に同一の標準語や文字共通語が被さっていることが必要(同：466)」とされる。ここで考えるべきは、言語そのものの特徴として記述される内的要因と、その言語をつつむ環境に存在する外的要因を分けることである。前者は言語に生来固有の特徴であり、後者は人為的性格の強い特徴である。

音対応のみならず構造的・語彙的な類似を含めて明らかに姉妹言語と認められるほどの近親性が、まず言語内的要因による「方言」と認定する基準となることに異論はない。日本語とアイヌ語の関係は、同一国家の内部に存在していても、あきらかに構造的な違いを有し、長期にわたる傍層関係により語彙的な類似や音的な近寄りはあるとしても、親族関係にある言語どうしとは認められないものである。したがって互いに方言ではない。一方、津軽「方言」から沖縄「方言」(あるいはより近いところで鹿児島「方言」)にかけては、隣接方言との音対応などの「方言」性の検証を繰り返しながら、当該2「方言」の間に互いには意思疎通が不可能であるほどの違いはあるとしても、「方言」であるとの位置づけがなされる。

このような言語に内在する特徴を基準とすれば、国家を越えて方言が存在することになる。たとえば、ドイツと、スイス、オーストリアのドイツ語は、この基準通り「方言」である。一方、イタリア語とスペイン語すら、互いに「方言」となってしまう危険性は否めない。

イタリア語とスペイン語のような国家の枠を越えて存在する姉妹言語を、「方言」ではなく「言語」と位置付けているのは、それぞれに標準語が設定されているか否かという言語外的要因による基準である。

しかし、双方の基準とも盤石のものでないことは言うまでもなく、「言語」と「方言」は常に「汽水域」を有している。以下、個別のケースについて見ていく。

### 2.2 スペイン～言語の規模と国家統制

20世紀のスペインでは、第二次世界大戦以前からフランコ独裁政権の崩壊による解放に至るまで、標準語であるカスティーリア語(=スペイン語)以外の言語は弾圧の対象となってきた。スペインには、「スペイン語」だけが存在し、スペイン語とは系統的にまったく異なるバスク語はもちろん、西ロマンス語という分類に属する近親関係にあるいくつかの言語(方言)も、公的に用いることは許されなかった。

スペイン国内の事情の変化により1979年カタルーニャ州が自治州となり、EU統合への流れによって、特に新世紀になってからは、スペインがスペイン語だけの国家であるということは完全に過去のこととなりつつある。主立った言語だけでも、バスク語、カタルーニャ語、ガリシア語(以上3つが地方公用語)、アストゥリエス語、アラゴン語、バレンシア語(カタルーニャ語の方言とも言われる)が、カスティーリア語(=スペイン語)とは異なる言語として何らかの言語に関する自立性を主張している。

## [カタルーニャ語]

カタルーニャ語は、EUの公用語となっていない<sup>4</sup>言語の中で、1,130万人（2001年：竹中2005:37より）という最大の話者人口を抱える言語である。これは、EU公用語であるポルトガル語よりも大きな人口である。「言語」としての認定が話者人口で行われるわけではないことは、この例からも明らかである。

言語内的特徴はどうであろうか。

次の文は、前掲朝日新聞2006.5.24に載せられたEl Periodico誌の一面見出しであるが、一見しただけでも、これらが異なる2つの「言語」によって書かれているとの認定は下すことが容易でないことはわかるであろう。

カタルーニャ語 Espanya avisa Bolivia de les conseqüencias de la nacionalitzación

カスティーリャ語 España avisa a Bolivia de las consecuencias de la nacionalización

目的語Boliviaが前置詞aを伴うか否かや、冠詞の違いといった文法的特徴も、この短い文の中に見られることは事実であるとしても、より明らかに、これら2つの「ことば」は似ているとの主張を覆すには至らない。つまり、「方言」であるとの主張は十分に可能であることがわかる。

一方で、カタルーニャ語にはカスティーリャ語とは異なる「言語」であると主張するいくつかの特徴も、さまざまな研究書から拾い集めることは可能である。たとえば、カタルーニャ語は母音が8つでありカスティーリャ語は5つであるし、通常、語頭にfが現れないカスティーリャ語に対し、カタルーニャ語では俗ラテン語にさかのぼれる語頭のfを保持するなどの音韻特徴が認められる。文法的にも、カタルーニャ語ではanar「行く」＋不定詞が現在完了を表すという、ロマンス語全体で見ても珍しい特徴が認められる。

日本での事例と比較して言えば、「それなら (sorenara)」に対する「ほな (hona)」のように、音対応としての規則性のほか、「～よる」による動作持続を表すなど、いくつかの音韻的特徴と文法的特徴が、語彙的特徴に加えて存在する西日本方言は、カタルーニャ語と比較しても「言語」らしさを有していると言っても過言ではない。

たしかに、nyaやtzaなどの綴り字によって醸し出されるカタルーニャ語らしさも、「スペイン語＝カスティーリャ語らしからぬ」という点で「言語」らしさを表現している可能性はある<sup>5</sup>。日本語の場合、意味の大半を担う自立語は漢字で表され、ふりがなでもふらないかぎり、書きことばとしては音の特徴も表しにくい。ローマ字という表音文字によるか漢字という表意文字によるかという書記法の違いが、人口的規模ではカタルーニャ語に比肩する<sup>6</sup>日本の諸方言を「方言」として位置付けている大きな要因となっていることも事実であろう<sup>7</sup>。さらには、高低アクセントという、これまた表記が難しい特徴をもつことも、方言的特徴を、話しことば的特徴へと矮小化するきらいがあるのではないか。

音声的特徴を表記に表しにくいということは、その「ことば」に存在している特徴の大きな部分を、話しことばの特徴としてしか捉えられないことを表している。話しことばが即、文語となりえない存在であるとはいえないが、日本の「方言」はやはり地の文を書き表しにくい<sup>8</sup>。

このような、いわば文語性の欠如は、教育での取り上げられ方に影響する。カタルーニャ州でおこ

<sup>4</sup> 2005年11月、EU議会は、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語に対し、通訳付きでの使用を認めた。

<sup>5</sup> 他にカタルーニャ語には、ix[ʃ], tg[dʒ], tj[dʒ], tx[tʃ]のような、ロマンス語全体で見ても珍しい綴りもある。

<sup>6</sup> 大阪府の人口は900万、近畿地方という括りで言えば2,200万人の人口がある。

<sup>7</sup> この点で山浦(1985)における、ローマ字表記のケセン語(気仙沼方言)に関する記述は画期的である。

<sup>8</sup> 後述する共通教育の授業では、毎年課されるレポートで岐阜方言訳を試みる学生が多く見られるが、その大多数はどのように方言的特徴を出すかで苦慮している。中で多く見られるのは、会話部分にのみ方言を用いるパターンである。

なわれている教育では、スペイン語 (=カスティーリャ語) での授業は基本的におこなわれず、すべてカタルーニャ語による授業である (朝日新聞2006.5.24)。このことは、授業で先生が話すことばがカタルーニャ語であるだけでなく、教科書も、そこに載せられる国語の文章もすべてカタルーニャ語であるということを意味している。教育の手段として用いられ、学問が十分におこなわれる「ことば」が「言語」であるということは、すでに自明ともいってよいものである。

カタルーニャ語は、中世以来の歴史と独自文化をもち、言語文化としての文学も花開かせ書記法も整備されていった経緯がある。長い間かけて培ってきたこのような歴史が、日本語の諸方言とは事情の大きく異なるところである(沖縄については後述)。

### [アストゥリエス語]

ポルトガルとの国境近くで話されているアストゥリエス語は、ポルトガル国内でミランダ語と呼ばれる言語と基本的に同言語とされるが、両国の話者を併せても話者人口は50万人にも満たない小言語である。カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語等、スペインの他のEUの準公用語的言語とは大きく事情が異なる。にもかかわらず「言語」として主張されるのはなぜであろうか。浅香 (2005) からは、9世紀後半建国のレオン・アストゥリアス王国以来、中世に文書語として用いられたことが大きな要因として、この言語の独立性が主張されているように見える。カタルーニャ語同様、やはり歴史的に言語としての独立性を保った時期の存在が、人々の意識の中に「方言」ではなく「言語」として位置付けているのである。

20世紀、フランコ独裁政権による弾圧は、当該言語話者の確実な減少とともに、小言語であることの危機感の強さという推進力を先鋭化した。浅香(2005:153)によると、1980年に創設が認められたアストゥリエス語アカデミアは、次のような活動をもって「言語の正常化」を推し進めている。

1. 言語規範の確立：正書法制定、文法、辞書編纂、地名表記
2. 文学の発展と促進：作品の刊行
3. 教育：教育者養成、教科書編纂
4. 言語研究

日本の方言に関して、多くの辞書が編纂されていながら、言語としての地位が確立するに至るにはほど遠いということを考えれば、現状分析もしくは過去の遺物収集だけで人が用いる言語となることは期待できない。正書法を制定することによって教育、文学発展へとつなげ、当該言語を「目的」ではなく「手段」として位置付け、それをを用いることによって、意識的自立だけでなく経済的メリットを得ることができるようにすることが求められている。

しかしながら、教育に関しての報告を見る限り、アストゥリエス語の未来は明るくない。アストゥリエス州では、州2、3時間のアストゥリエス語による授業が行われ、2000-2001年度で208校15,227人の初等教育生徒数を有する (浅香2005:159)。しかし、中等教育においては、その数が激減し千人にも満たない (同)。このことは、やはりアストゥリエス語が「方言」に過ぎないことを示している。中等教育以上での限定された使用は、話しことばとして慣れ親しむには適しているが、高度な概念を伝える「言語」としては不十分であることの確たる証拠でもある。

スペインの2つの事例からは、伝統文化に支えられた固有言語としての歴史と、当該言語を使用することによって得られる経済的自立性のいずれが欠けても、「言語」とはなり得ないことが理解される。

### 2.3 フランス～国家による言語規定の有効性

Ethnologue15版 (2005) によれば、フランスには、アルザスに人口150万を擁するAlemanisch (アルザス語) やブルターニュ半島に50万人の話者をもつBreton (ブレトン語) など、フランス語とは系統的に異なる言語が存在するのをはじめとして、131万のOccitan (オクシタン語)、34万のCorsican

(コルシカ語)、25万のProvençal (プロバンス語) などが存在するとされる。人口的には、統計にもよるが、1割程度は、フランス語以外のフランス土着の言語を、移民としてフランスに入国した人たちの母語とは別に、母語として用いていることが知られている。オクシタン語とプロバンス語は、中世以来の文学的伝統をもつ反面、16世紀以降はフランソワ一世が1539年に出したフランス語使用令以後特にフランス語から独立して言語として認められてはこなかったという歴史的背景をもつ（この経緯については工藤1980第Ⅲ章が詳しい）。コルシカ語も、イタリア語トスカーナ方言の一変種に位置付けられるほど、フランス語から言語的に離れているにもかかわらず、やはり独自の言語文化を十分に育んでこなかった。

現在のスペインとフランスにおけるこのような地域言語の扱いの違いは、それぞれの国内事情によるところが大きい。スペインでは、フランコ独裁政権時の弾圧への反動からか、近年、言語的な独立に関しては、欧州憲章が保証する地域言語の公的使用権が大きく認められてきている。このような言語政策には、まさに「国」としてのありかたを大きく揺るがしかねない事態へとつながる懸念が常につきまとう。

一方、同じEU加盟国であるフランスでは、1635年以來の歴史を持つAcadémie françaiseが「フランス語とは何か」を規定し続け、1992年の憲法改正でもフランス語が共和国の言語として位置付けられている。また、教育、就業、公益、公共サービス等公的場面でのフランス語使用の義務を定めるトゥーボン法<sup>9</sup>が1994年に成立し、フランス語の絶対的な地位は揺るぎないものとなっている。この法律はフランス語への英語の過剰な侵入を食い止めるために制定されたものであるが、同時に、コルシカ語をはじめ、多くのフランス国内に存在する少数言語の権利主張をも封じ込めることになってきた。

2001年4月になって、フランスが18世紀以來長きにわたっておこなってきたこのようなフランス語一辺倒の政策を反省し、地域言語を含む複数言語教育をおこなうことが公式に宣言された([http://en.wikipedia.org/wiki/Languages\\_of\\_France](http://en.wikipedia.org/wiki/Languages_of_France)から要約)が、あまりにも長きにわたるフランス語以外を排除する中央集権的政策により、フランスにおいて方言 (patois) は軽蔑されるべきものとしてのニュアンスも強く残る。インターネット上で地域言語尊重のページはいくつも見られる<sup>10</sup>一方で、地域言語が公用語となるほどの動きは今のところ見られていないのが現状である。

フランスの現状から私たちが学ぶことは、国の統制によって言語的自立への動きはある程度押さえられることがあるということである。中央集権的な国家権力により制定された標準語は、国家としての一体性の上に発展への原動力となる。この状況は、明治以後の日本の姿に酷似するものがある。一方で、これだけ中央集権的な言語政策をおこなってきたフランスにおいてすら、民衆のこぼれを完全には抑えきれないことも学ばなければならない。2001年のフランス語以外の言語教育権容認は、およそ500年ぶりの大きな変更ではあるが、同時にフランスは二言語政策 (bilingualism) を容認しただけで、フランス語が地域言語に取って代わられることは想定していないことも見落としてはならない。

言語学的に見れば、フランス語の母体となった北のlangue d'oïlと南の諸言語との言語内的特徴の差異は大きいと言われる。歴史的にも中世まで別の途を歩んできた2つの大きく異なる言語(群)を「方言」と位置付けているのは、まぎれもなくフランス語という上位に存在する標準語の存在である。日本の場合も、法的に制定された標準語ならずとも共通語が浸透している以上、やはり地域言語はフランスと同様の(多少軽蔑の意味が込められた)「方言」として位置付けられていると見るのが正しい

<sup>9</sup> LOI n° 94-665 du 4 août 1994, relative à l'emploi de la langue française  
(<http://www.culture.gouv.fr/culture/dglf/lois/loi-fr.htm>より)

<sup>10</sup> たとえば、LEXILOGOS ([http://www.lexilogos.com/france\\_carte\\_dialectes.htm](http://www.lexilogos.com/france_carte_dialectes.htm)) など。

であろう<sup>11</sup>。

## 2.4 ギリシャ～標準語とは何かをめぐる論争

ギリシャ語には、長い歴史を持つ言語ならではの、相互に理解不可能なほどの方言がいくつも存在する一方、19世紀まで長くオスマントルコの支配下にあったことにより、共通語は長い間存在してこなかった。独立直後から、どのようなことばを公用語とするかについては、論争が戦わされ、「民衆の口語をもとにしたディモティキ(民衆語)と、古代アッティカ方言を基盤として、文語と口語を折衷した擬古的なカサレヴサ(純正語)(村田 2005)」とが、互いにその有効性を(時には感情的に)主張して生きた。現在でも、その火種は完全に消えたわけではなく、「ギリシャ語」と呼ばれる言語の中に、ふたつの形態の言語が併存するダイグロシア(diglossia)状況を作り出しているとのことである。

ディモティキはアテネ方言を中心として作られた新しい民衆語である。下図1は時間とともに地域ごとに分散する言語状態をモデル的に示したものの<sup>12</sup>であるが、ちょうどディモティキは点線で囲んだ部分のように位置付けることができる。人の口から実際に発せられている口語の強みは、現代の日本語の状況を見てみてもすぐ理解できる一方、ギリシャ全土で用いるには馴染みのないことばである地域があまりにも多いという欠点をもつ。もう一方のカサレヴサは実線の○で示したような古語的状态である。方言的隔たりが多い言語において、その隔たりがより小さい前時代の言語を摸した擬古文体は、少なからず古典に対する教養を必要とし、完全に教育に用いられるに十分な言語であると言えないことは想像に難くない<sup>13</sup>。

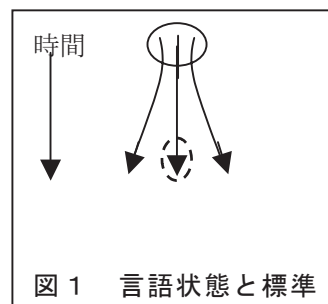


図1 言語状態と標準

国家を代表する標準語を制定しようとするれば、通時的にであれ共時的にであれ、言語的乖離を内包し一部の話者にのみ与するものとなることは自明のものである。首都の言語ということは、権威的には有効であるが、実際に全土にわたってコミュニケーション可能なものかどうかは別問題である。

翻って日本の状況を見れば、これほどまでのダイグロシア的乖離は存在しない。共通語が方言を覆う形で存在していることは、方言に存在する過去から受け継いだ財産を多く葬り去ってきたことと引き替えに得た長期間にわたる教育の成果である。確かにある国家の中で、共通した意思疎通可能な言語を求め、それが日常的な話しことばにより近いものであることを求めるとすれば、今の日本の状況は、共通語確立という一面において、ギリシャよりも成功していると言えるのかもしれない。

## 2.5 セルビア・クロアチア・ボスニア～宗教的理由による「言語」

宗教が大きな要素となって「言語」が規定される場合もある。

中島 (2005) は、セルビア語とクロアチア語について、両者を「関東・関西程度」の差異しかもた

<sup>11</sup> ただし、日本のようなde factoスタンダードのような「共通語」のありかたは、恒常的に非常にスピードの速い言語変化を内在させる可能性がある。観察すれども規定せずという言語学者的なあり方に国立国語研究所が留まり続けているのは、(フランスのような規定が存在すれば存在するで批判が噴出することは火を見るよりも明らかであろうが、それを棚に上げて) 無責任との見方とてあろう。

筆者自身は、研究者として国研の現在のスタンスに賛成であるが、ことばに関するさまざまな講演を行う場合には、必ずと言っていいほど、「ら抜き」を間違ったことばであると言ってほしい聴衆を見かける。国家機関による言語の規定が一面で求められているのも事実である。

<sup>12</sup> もちろん、ひとつの言語状態からすべての方言が分散するわけではない。

<sup>13</sup> 実際に、地域地域で方言を用いて教育などがおこなわれたことも報告されている (<http://ja.wikipedia.org/wiki/ギリシャ語>)。

ないにもかかわらず「言語」と主張されることを、大きな要因を宗教と宗教に根ざした文化の差と見る。セルビアは正教、クロアチアはカトリックという宗教の違いが、前者がキリル文字を用い、後者がラテン文字を用いるという違いの原因となっており、異なる「言語」らしさを誇張している。さらには、外来語の取り入れ方の違いを通じて差異を明確にしているとの観察は、宗教が「言語」を規定する要因になりうることを示唆している。また、言語的に類似するボスニア語の話者はイスラム教徒である。

日本では、このように宗教が大きな要因となって言語、あるいは方言が規定されるということは考えにくいだが、方言の中で宗派の違いによって「住職」の呼び方に違いがあるということは語彙レベルにおいて生じることはある。程度問題かもしれない。

## 2.6 まとめ

諸外国の事例を見れば、国家という枠の中で、「方言」か「言語」かという境は、共通語の存在を必ずしも絶対的基準として決定することができないことを示唆している。歴史的に今の枠組みの国家は一時的なものでしかないと捉え、過去にさかのぼって言語的自立を求めるとすれば、自らが共通語となることで「方言」と位置付けられてきた地域言語は「言語」へと昇格される可能性がある。それは、言語内的要因である音韻的・語彙的・文法的特徴によって類縁関係にあるかどうかは副次的な問題でしかなく、より重要なことは、歴史と呼ぶにふさわしいほど長期にわたる自立性であり、その期間に育まれていく文語などへの昇華であると結論づけられる。

歴史的に見れば、おおよそ「言語」と「方言」は次のように、その境界域を策定してきた。縦軸は話者人口、横軸は言語(順位)である。波線は「言語」と「方言」との境界である。

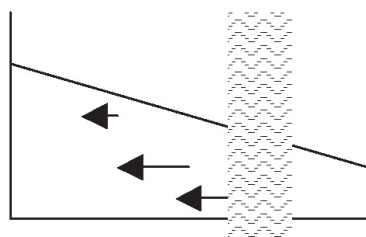


図2-1 近代以前の言語と方言

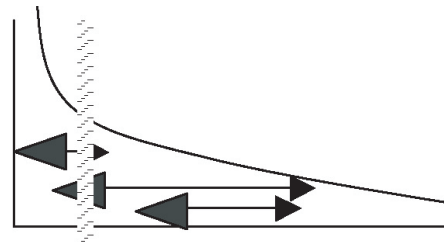


図2-2 現代の言語と方言

近代以前は左のように、言語間の差異は相対的に見て小さくなく、地理的に隣接したより有力な言語へと吸収される速度も緩やか、かつほぼ一方方向に存在していた。国家の規模にもよるが、比較的小規模の話者人口を要することばであっても、「言語」となり得るものであった。しかしながら、現代においては、国家による標準語が強大な人口を有するにいたる反面、リージョナリズムも模索される、双方向にことばが行き来する図2-2のような様相を呈しているものと考えられる。「言語」としてのハードルは高くなる一方、経済学のロングテールのように無数の地域言語の価値も無視できない「市場」となっている状況である。このような状況において、話者はより経済的メリットのある共通語・標準語を得ようとする一方、地域のことばによって個性を身につけようとする、いわば内的ダイグロシヤ状況が成立する。

現在の日本での状況を考えれば、アイヌ語は別として、「方言」から「言語」へと昇格できる候補は2つある。1つは、関西圏である。現在の関西圏の自立性は、人口規模から見てもカタルーニャ語に匹敵するものを有するにもかかわらず、その言語的独立を政治的には主張しないのは、現実主義に徹したやりかたである。これは、関西圏が歴史上、他の地域から切り離されて独立した国家体制を保持したことがないことにも関わっているのであろうか。もうひとつは沖縄である。沖縄には琉球王国という歴史を理由に、(政治的な独立はともかくとして)言語的独立を主張する十分な権利があるで

あろう。

逆に、東海圏が言語的独立を叫び公用語としての地位を獲得していくことは容易ではない。歴史的に尾張方言での文学は多数存在し、中部経済産業局が中心に進めているグレーターナゴヤ構想が話題に上るほど経済的にも世界有数の経済力ならびに人口をもつ地域であるが、言語的なまとまりは考えにくい。岐阜と愛知には、音韻や語彙に共通性が多いが、文法的には「ヤ/ジャ」を用いる西的な岐阜と「ダ」を用いる東的な愛知とでは、基本的な共通性が見いだしにくい。また、愛知でも尾張と三河の言語的差異も小さくない。西に目を転じれば揖斐川を挟んで関西圏の東端となる三重県とは音韻的な違いが大きくなる。このような3県が言語的独自性を主張する地域で共通語を提唱することは困難であろう。

本節においては、諸外国の例との比較を通じて、「言語」と「方言」の違いについて考えてきた。

### 3. 「方言」学習者は何を学ぶのか～ケーススタディからの考察

#### 3.1 岐阜大学全学共通教育における方言講座～若年層の「方言」学習

筆者は、3年前から岐阜大学全学共通教育で岐阜方言を学ぶ講義をおこなっている。タイトルは多少変えているが、シラバスには毎年、岐阜の方言を文法構造をもつひとつの言語として捉え学ぶ旨記している。受講生は、おおよそ、1年目が180名、2年目が(学外受講者も合わせて)180名、3年目が220名という盛況ぶりである。内容は、教科書として筆者自らの母語を中心に書き下ろした『みんな使おっけ! 岐阜のことば』<sup>14</sup>を用い、岐阜のことばによる会話と語彙、文法を学ぶというものであり、加えて、毎回、全国各地あるいは世界の方言についての解説コーナーを設けている(山田2005参照)。

本講義には、第1節に記した、同世代の2種類の話者、すなわち岐阜県出身者と県外出身者が、おおよそ半々の割合で参加している(留学生と学外受講者については後述する)。

岐阜県出身者に関しては、全員が、筆者の母方言と同じ言語を母語とするわけではない。方言は通時的にも共時的にも連続体を形成しながら差異を有している。最も大きく異なる飛騨方言の話者にとって、同書に用いている岐阜市(北部)方言は、他県のものと比較すれば相対的に馴染みもあるにせよ、やはり異なる方言との認識が強いものである。東濃方言話者の多くは、アスペクト形式の「よる」の使用をはじめ、いくつかの語彙についての差異を感じながらも、やや同じ方言の変種であるという意識が強いように見受けられる。特に違いを話すからかもしれないが、細かく見れば、中濃や西濃出身者も違いを個別に感じてはいながらも、おおよそ「岐阜方言」という範疇に自らを位置付け聞いているように思われる。

このような母方言を共有する学生たちは、どのような意識を持って受講するのであろうか。2006年度前期の受講者が、第1回の授業で書いた受講動機からピックアップしてみる。誤字等、すべて原文のまま。前後は省略してあるものもある。所属や出身地は、内容と関連がある場合にのみ記した<sup>15</sup>。

・看護師は様々な人々と関わります。患者さんは、自分と同じ方言で話されると、安心し、私たち

<sup>14</sup> 心情としては言語的独立を謳うか、もしくはそれを目標として掲げ、「岐阜語」ということばを使いたいが、現状では難しいとの判断から「岐阜のことば」ということばを用いている。しかし、ここには「方言」以上の言語的自立性への意図が含まれている。

<sup>15</sup> これらの受講動機は、もちろん、記名式でおこなわれた点で、授業者に対するリップサービスが少なからず含まれていることを考慮に入れて考えなければならない。また、2006年度については、あまりに多い受講希望者の中から、受講動機が薄弱である場合には受講を認めないものもあるという宣言をしたために、より授業者にとって好ましい理由を書いてきた可能性もある。



に心を開いてくれると思う。そのためにも様々な方言を学んでいきたいと思う。[医学部看護学  
科学生]

- 大学に入り始めて、私は自分が方言を話しているということを自覚しました。(中略)他県の人と接し、指摘されて始めてお互いの言葉の違いを意識し、「でえらおもしれえ」と思いました。これからもっと方言について詳しく学びたいです。
- 知っていることがそれほど無いので、多くのことを学びたい。
- 私は、岐阜県のはしっこに住んでいるからかどうかはわからないけど、岐阜弁に、たまに愛知弁が混ざります。(中略)方言からわかる県民性も知りたいです。[各務原市出身]
- あまり岐阜以外の土地に行ったことがないので、自分が方言を使っているのか意識したことはありませんでした。でも、滋賀に住むいとこに「それってどういう意味？」と聞かれたときに、方言を使っていることを実感し、興味を持ちました。土地によっての言い方の違いを知ることができるのがとても楽しみです。
- 関は関西と関東の境になる町の1つなので、関弁は関西・関東が混じって出来ていると聞くと、本当なのだろうか。[関市出身]
- 私は、大阪や九州あたりなどには方言があるけど岐阜にはそんなに、他の県の人に伝わらないような方言はないと思っていました。だけど鹿児島にいる、いとこと話していて「机をつる」ということばは伝わらないことが判明して、自分で使っていることばの中にもそんなことばがイッパイあるのかなぁと興味がわいてきました。
- 小さい頃からずっと岐阜に住んでいるので、もっと自分の県のことを学びたいと思うし、他の県の方言の由来などにも興味がある。国語が好きなので、言葉の成り立ちももっと知っておきたい。
- 私はHPを持っていて、全国に友だちがいます。その友達と電話で直接会話をしてみると、岐阜の方言のことが客観的に分かります。(中略)私は岐阜の言葉を見直す機会が多いので、じっくり勉強したいです。
- 日常で使う言葉なのでより深く知り学びたいと思う。
- (前略)高校に入ってから同じ市の中でも色々な方言がありました。方言かはわかりませんが、「どれにしようかな」の歌などは同じ中学の中でも違うくらいで、どうしてそんな違いができたのか、気になりました。また、方言にも地域によっての性格みたいなものが出ていて、大切にしたいものだと思うので、より深く学んでみたいと思いました。
- いつもの感覚で他県の人に「何で？」と岐阜のイントネーションで話しかけると、ひどく恐がられると聞いた覚えがある。(後略)
- 方言の温かさを知って出身地の郡上の良さを再確認したいし、いろんな地域の言葉を通して方言使用の楽しさを知りたいです。[郡上市出身]
- 岐阜県の方言は攻撃的であったり、名古屋方面の方言に似ている部分があるのが面白いと思います。家庭内でも、祖母の方言と自分の世代の方言との違いとか話し合うことが多いので、ぜひ学びたいと思います！
- 自分は言語教育にたずさわりたい、岐阜で働きたいということで、岐阜方言ほど面白いものは無いし、必須のものだと感じています。岐阜に住んでいながら知らない岐阜弁もあるし、逆にこの授業を通して別の方言や言葉使いを客観的に見つめることで将来自分の役に立ってくれるものと思っています。他の県から来た学生さんと言語についての交流もできるということで、非常に楽しみにしている(後略)
- 中学の国語の授業で方言について少し調べることがありました。短い時間でしたがとても興味がわきました。大学でくわしく調べられるのならぜひやってみたいです。
- 方言を文方的に学ぶのにも興味があるので受けてみたいです。

- ・私は将来多分ずっと岐阜に住みついて、他県には行かない気がするので、きっとこの授業は大切になってくると思います。
- ・祖母や祖父としっかりコミュニケーションを取りたいのでこの講座を取りました。

全体の十分の一程度しか挙げることはできないが、この中でもいくつかの特徴を見いだすことが出来る。

数の上で多いのが、他県の人との会話を通じて、自らの方言の特徴を知り、興味関心を抱いたという動機である。これは、岐阜県出身であっても、県内に存在する、あるいはより身近に市内に存在する方言との違いを感じて同様の関心を抱くことと同様に、異言語接触による方言認識が受講動機になっているパターンと分析することができる。方言を題材にした授業を受けようとしている学生であるため、異言語接触による負のイメージ形成ではなく興味となっている点は考慮に入れておかなければならない。特に岐阜方言に対し負のイメージを投げかけられたことへの反発が動機になっている受講生も何人か見られた。やや数の上では少なくなるが、そのような異言語接触を介さないで（少なくとも大きな動機として明記はされないで）内省的に自らの言語について知りたいと感じている意見も散見される。授業者が説明したためであろうが、文法に興味を持った学生も複数見られた。これらの学生はことばを通じたアイデンティティ確立が主たる受講動機と見てよいだろう。

一方、さらに将来の職業に積極的に活かすための知的財産として方言を学ぶという姿勢のものも、特に教育学部と医学部に、それぞれ1割程度いた。

テレビや雑誌などの影響か、方言をブームとして学びたいという意見も10名を超える学生からの意見に見られた。特にこの場合、東北や沖縄といった言語的に離れている方言の学習に対する要望が添えられていた。これらは、外国のことをより知りたいという、若い頃にありがちな欲求に似たところがある。

岐阜県外出身者にとって、岐阜方言を「学ぶ」意義はどのように写っているのだろうか<sup>16</sup>。

隣県出身者では、愛知県出身者が、岐阜県出身者と同数程度登録している。

- ・まず、岐阜の方言との出会いは、4/4の新入生歓迎会の時でした。「机をつる」という言葉に衝撃を受けました。私の住んでいるところでは「机をウラにさげる」という言い方をします。4年間岐阜大で過ごすからには、必ず岐阜の方言をマスターして、地元の方である“じゃん・だら・りん”を卒業したいと思っています。[愛知県豊川市出身]
- ・岐阜方言の意味を知ること、岐阜という地を理解したいです。[愛知県碧南市出身]
- ・（岐阜方言を学ぶことが）自分の方言についても考え直す機会になればいいと思います。[愛知県刈谷市出身]
- ・普段テレビなどで言われている『名古屋弁』はもう若い世代では言わなくなってきているようです。多分知らない方言もあるので、そういうことも学べたらいいと思っています。東北方言を知りたいです。[愛知県名古屋市出身]

<sup>16</sup> 受講生の中で半数近くを占める愛知県出身者については、三河出身者はともかく、尾張出身者を異方言話者と呼べるかどうか問題もある。指定辞として「や」を用いるか「だ」を用いるかは大きな言語的違いとして存在し、また教育委員会の違いから、漢字ドリル・計算ドリルを「カド・ケド」と略すか「カンド・ケード」と略すかや、授業間の休み時間を「休み時間」というか「放課」というかなど、いくつかの違いは存在するが、圧倒的に共有する語彙が多いのがこの岐阜と愛知の現状である。むしろ勧誘・命令の形式として「食べやー」や「書きゃー」のように「やー・ゃー」を用いる特徴は、岐阜市を含めた美濃地方は広く尾張地方と同じであり、異言語話者として愛知県出身者を挙げるのは異論もある。ここでは一応、岐阜県出身者以外の意見を拾っておく。

- ・方言マニアになりたい。[愛知県東浦町]
- ・将来、岐阜の地で、意志として、この土地の人々と接していきたいので、ぜひこの授業を受けて、岐阜の方言をマスターしたいんで、でらがんばります。[愛知県名古屋市出身]
- ・中学生の頃から方言に興味があるようになって尾張弁(名古屋弁)の本をたくさん読むようになりました。(中略)弟と一緒に尾張弁と三河弁の比較表を作ったりしています。(中略)方言に調べることが好きなので、ぜひ参加したいです。

愛知県出身者には、岐阜県出身者が愛知県の方言に対して抱くほどのライバル的捉え方は見られない。むしろ肯定的に自分が今置かれている環境で話されていることばに関心を持っている姿が見て取れる。一方で、三河出身者には、やや強いアイデンティティか逆に自らの方言に対する卑下意識が(一部の学生に限定されたことかもしれないことは十分考えられるが)存在する。愛知県といっても言語的多層性をこの受講動機からも読み取ることができる。

一方、さらに遠方の県外の出身者はどのような意識をもっているであろうか。

- ・岐阜弁をマスターして、岡山に帰って、家族や友達に自慢したいです！[岡山県出身]
- ・岐阜弁に染まりたいです。[長野県飯田市出身]
- ・岐阜はどういう風土の影響で方言を形成していったのかということを知りたいです。[富山県出身]
- ・名古屋弁も少し知っていますが、岐阜に来て名古屋弁と岐阜弁の区別がつきません。どこが違うのか知りたいです。[茨城県出身]
- ・自分は関西出身の関西弁でまわりにもあまり岐阜県民の人があまりいなく、愛知と岐阜の方言の違いも同じに聞こえてわからないので違いを詳しく知りたい。[兵庫県出身]
- ・静岡に住んでいきたいので、関西地方の言葉に興味をもって、逆にこっちの人にも遠州の言葉を知ってほしいと思っています。(中略)地元の友達に岐阜の言葉で話したいと思ってます。[静岡県出身]
- ・僕は熊本に住んでいたのですが、岐阜の方言についてぜひ勉強したいです。!! (中略)僕は今までゲーとパーでしたので、ゲーとチョキは初めて聞いたのですごい意外でおもしろかったです。まだまだ文化的な違いがありそうなので、この講義を受けて岐阜について学んでたくさん岐阜の友達を作りたいと思っていますので、ぜひこの講義を受講させてください。[熊本県出身]
- ・三重は東海に属していますが、岐阜とは全く言葉が違うと大学に入学してから知りました。特に私は県内でも端(奈良寄り)なため最も身近な言葉は関西弁だったので岐阜がこんなに東よりのアクセント、発音だと思ってなかったので驚きました。[三重県出身]
- ・岐阜に来て地元で使っていた「～やんす」という言葉が通じないことを知った。(後略)[滋賀県出身]
- ・就職を岐阜でしようと思っているので、この授業を受けてコミュニケーションに役立てたいと思います。[京都府出身]
- ・自分の使っている方言(富山弁)は少し関西っぽく聞こえるらしいということが、岐大を受験したときに言われたのでおどろきました。[富山県出身]

やはり大きくことばが違う地域から岐阜に来て、異言語接触による率直な驚きをもったり、さらに、ことばを学ぶことに実質的なメリットを感じたりしての意見が多く見られる。一方、岐阜が愛知とどのように異なるかという点についての意見が複数あったのは興味深い。

大学生という世代については、母語としてことばへの造詣を深めていこうとしている姿とともに実利的な職業への活用も視野に入れて考えている姿も垣間見られる反面、やはり県外からの出身者には純粋なことばの違いについての経験から興味をもったという意見が多く見られた。蛇足ながら、実際にニーズもレディネスも異なる受講者の双方を満足させるような方言学習の場にするには難しいこ

とを毎年感じていることもつけ加えておきたい。

### 3.2 市民学習講座～中高年層の「方言」学習

より年齢の高い方をターゲットとした市民学習講座での状況はどうであろうか。

少人数でも有料での受講者がある場合や、特に関心が強い人の集まりに呼ばれた場合の講座は、ことに語源や語の分布といった点に関心が集まることが多い。語源などは、いわゆる「国語」の講義でもなされそうな内容である。方言を言語学的に体系として整理していくことも歓迎される。しかし、このような講座は稀である。

数百人が来場するような大規模な市民学習講座においては、「準備」の意味で用いる「まわし」が、他の地方では相撲のまわしと勘違いされそうであるという、まことしやかな笑い話程度の内容のほうがかウケるところもある。しかし、これはお笑いを聞いているのと大差ない。老年層の回想法的アプローチによる脳の活性化という点では有意義であるが、「学習」と呼ぶよりは福祉の分野に近いのかもしれない。

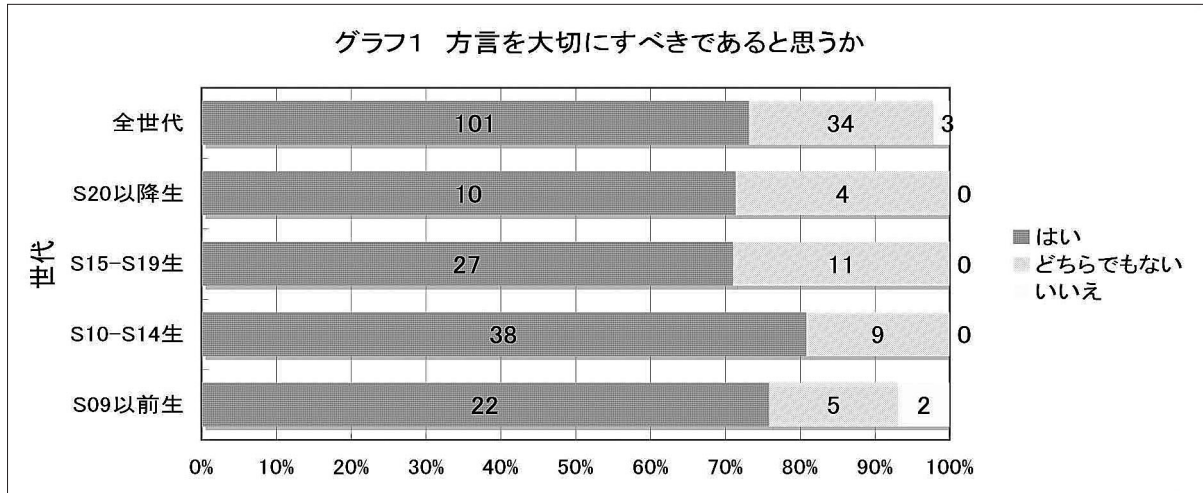
5,000円の受講料で15回の大学の講義が受けられるというメリットを謳う2005年度岐阜県国際ネットワークコンソーシアムとの共同授業 岐阜大学共通教育科目「岐阜県方言のしくみを学ぶ」においては、次のような受講動機が書かれていた。

- ・大垣地域と全国各地でよく似た言葉を学習したい。その地域の人との交流のなか、共通の言葉が親しみを増すと考える（その由来も知りたい）[1928年生]
- ・狭い日本で何ぞ<sup>マ</sup>、意身<sup>マ</sup>が通じない言葉が発達したか[1939年生]
- ・岐阜に来て関西系の言葉が多く聞かれ、佐賀とは全然違うので同じことなのに違う言葉を使う方言とかを知り、話せるようになりたい。またその方言の由来とかも知りたい。[1985年生]
- ・岐阜県人のメンタルな部分にもっともっと光をあててほしいともいます。岐阜県人はもっと自己解放すべきだ！と考えていますので。あと、何故、受講しようとしたかといえば、岐阜を愛しているから。ダニエルカール氏の著書を拝読して前々から気になる存在だったからです。岐阜のいいところ、わるいところをごき<sup>マ</sup>みよく切り刻んで下さい。[1972年生]
- ・人から方言がきついとよく言われるのですが、どこが方言なのか自覚したいと思い講義をうけようと思いました。岐阜市、可児市、北方町とびみょーな距離でひっこしすんでいるのですが、そのあたりのちがいもあるのでしょうか？[1966年生]
- ・大学なる所に自分の為に入ったのは幸せ。先は短いが楽しみたいと思います。[1944年生]

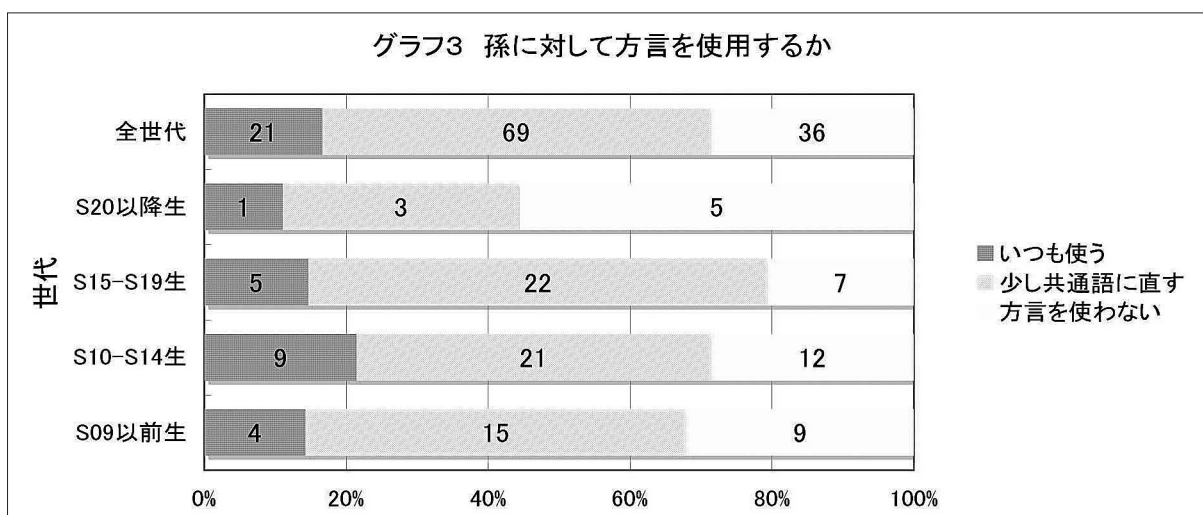
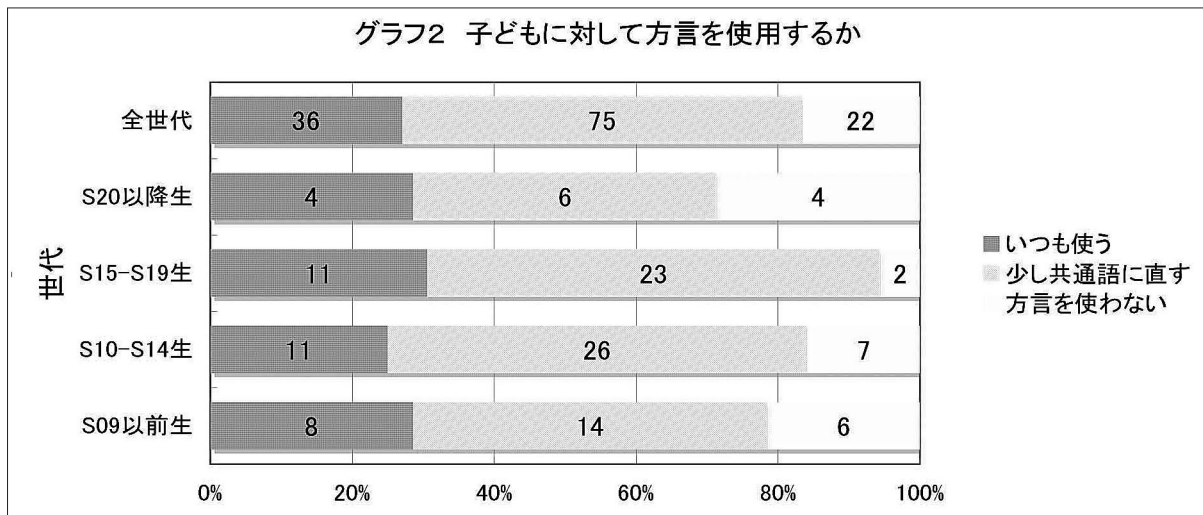
しかし、このような無辜の中高年層に、方言の価値を説くことは大きな価値がある。なんといってもこの世代の話者が孫や子に方言を用いなくなったことが、方言衰退の大きな要因であるからである。

この点については、2006年5月11日に、瑞穂市総合センター・サンシャインホールにておこなったアンケート調査の結果から考えておくことが有効である。

まず、150名ほどの受講生に、方言は大切にすべきであるかどうかを尋ねたところ、非常に肯定的な意見が得られたことを示しておく。



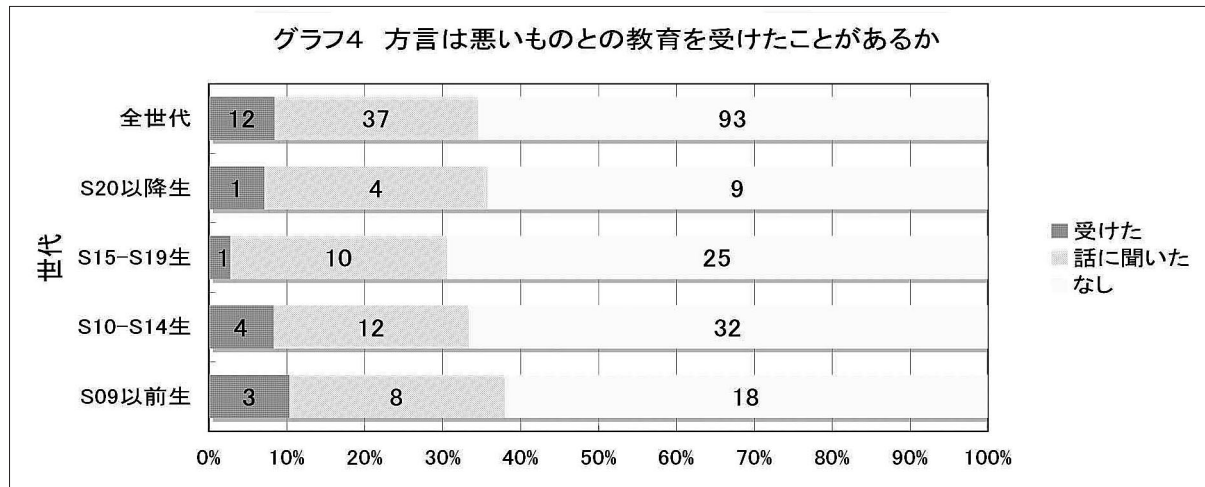
しかしながら、自らの使用という点について尋ねてみると、自分自身の子や孫の世代に対しては、あまり積極的に使用していない姿が浮かび上がる。



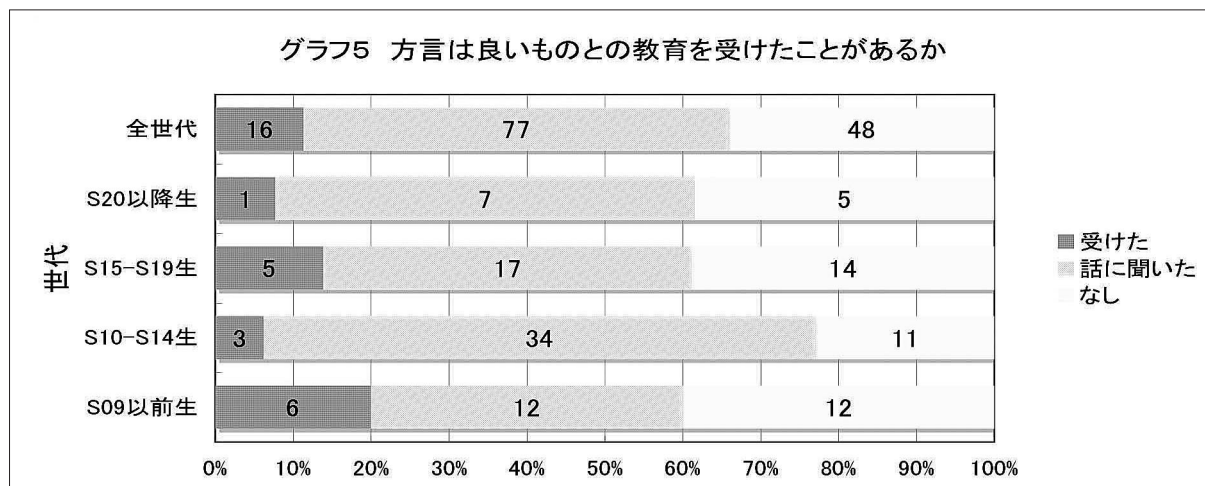
グラフ2とグラフ3からは、あきらかに方言を子や孫に伝えていっているとはほど遠い姿が見えてくる。これは、いったいどのような理由からであろうか。

ひとつ考えられるのは、戦前の方言札に代表されるような地域言語に対する否定的な教育であるが、

実際には、今回のアンケートからは方言を悪いものとして教育されたという人は少ないことがわかった。

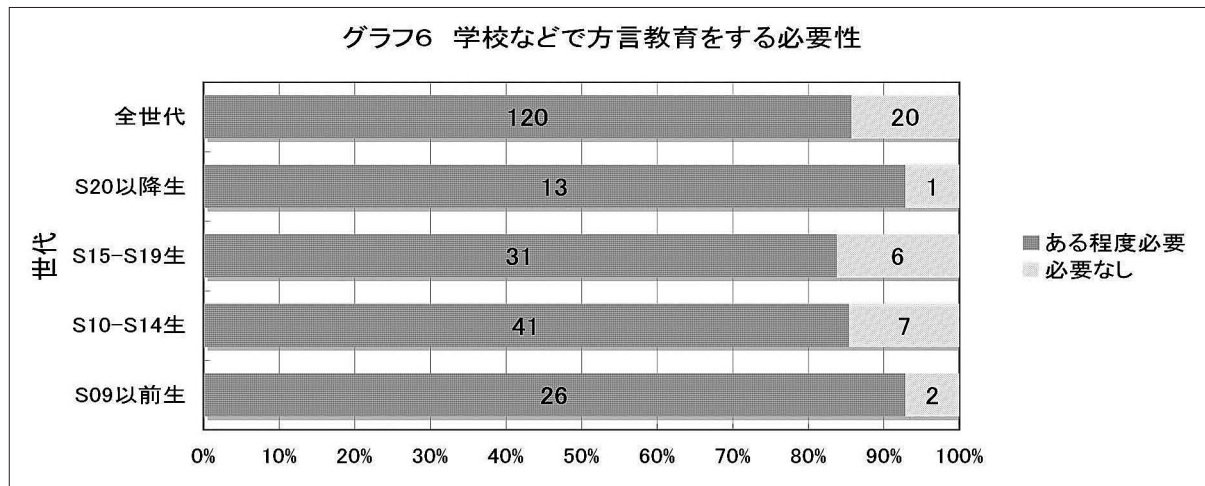


逆に、戦後の教育であろうか、「良いもの」との教育が、数の上では「悪いもの」との教育を、意外にも戦前に教育を受けた世代においても、上回る結果となった。



ここから、特に戦中、戦後に教育を受けた世代においては、方言は肯定的に捉えられているにもかかわらず、自ら使用することには躊躇があるという姿が浮かび上がる。それはなぜか。アンケートの不備から実際に数値としては表せないが、孫や子に方言を使わない理由の多くが「通じないから」であったことは、やはり注意しておくべきであろう。

戦後の学校教育とマスメディアの発達によって共通語化がいきに進み、同一地域における世代間言語の乖離が大きくなった。このことは、「方言は大切にすべき」であるが「通じない」というジレンマを生んだ。この点について、今回は方言復興への学校教育の役割も尋ねてみた。



学校で方言を教育する必要は、このように非常に高い率で肯定された。もちろん、これがすなわち第2節でみたような言語的独立を主張するということに結びつくわけではない。また、「学校などでの方言教育」に対するイメージも多様であろう。しかしながら、自らの母語である方言を見直すために学校教育が一定の役割を担う必要があると感じられていることは、着目すべきことであろう。

市民大学などで「方言」を学ぶ中高年層は、自らの興味関心のために「方言」を学び、次の世代への伝承を肯定しつつも自分たちだけでは伝えていけないことを感じている。こんな実態が浮かび上がってきた。

### 3.3 外国人が「方言」を学ぶ意義

新たに生じてきた問題として、日本語を母語としない住民が「方言」を学ぶことが挙げられる<sup>17</sup>。

方言を外国人が学ぶことに対しては、備前(1991, 1996)などいくつかの考察が見られる一方で、地域ごとについては、どのような方言を教える・学ぶべきかという議論に行き着く前に、依然として方言は教えるべき対象となるかという域を出ない議論もおこなわれている。このような議論のすれ違いは、「方言」をどのようなレベルで教える・学ぶのかということが確認されていないことによると考えられる。

「方言」として位置付けられる地域言語については、第2節で見たように、共通語の存在を前提とする。書きことばでありより高次の表現や伝達を担う役割が共通語にあるとすれば、「方言」には話しことばでの身近なコミュニケーションが重要な役割として分担されてくることは当然の帰結と言える。Cumminsらのことばを借りれば、共通語が認知学問レベルの言語能力であるCALPとしての役割を担い、方言が基礎的な対人関係のためのコミュニケーション技術であるBICSとして役割を担うという、連続しつつも複層的な言語として、地域言語を捉える必要性を示唆している。このような言語の複層性が十分に理解されないまま、方言を教える・教えないという議論をしても始まらない。

生活言語レベル(BICS)での方言使用は、すでにいくつかの研究が示しているとおり、身近な人間関係構築には欠かせないものである。いくら共通語で話せばよいといっても、そのような相手を選んでコードが切り替えられる言語使用は、使用される側にとって疎外感を生む可能性を否定できない。

また、日本語教育では方言を教えるべきでないという意識も、教える側に依然としてある。

2006年8月19日、岐阜ふれあい会館にて行われた岐阜県国際交流協会主催の日本語指導者研修では、次のような疑問点が挙げられた。

<sup>17</sup>「日本語を母語としない人」を便宜的に「外国人」と呼んでおく。両者は厳密な意味において区別されるべきであることは承知の上である。

・教室で無意識に方言でしゃべることがあったとき、どうすべきか。

この意見からは、方言は教室で用いないもの、あるいは用いるべきではないものとの意識が垣間見られる。この意見と同様の傾向は、備前(1996:346-349)が「(日本人は)外国人にはさほど方言需要は必要ないというような配慮がはたらいた(同:349)」と分析することと軌を一にする。

しかし、「方言」と一口に言っても、やはりレベルが存在する。岐阜方言で言えば「机をつる(持ち上げて運ぶ)」や「ほかる(放る・捨てる)など、生活で用いられ方言と意識されない表現(語や文法)は、たとえフォリナートークを用いる意識が日本語話者にあっても口から出てきやすいものであり、一般の人には意識さえされないで用いられる可能性が高い。また、頻繁に用いられる指定辞の「や」や継続・結果残存相の「～とる」などは、頻度故に、それを避けて地域生活を送れるような存在ではない。「書きゃー」や「食べやー」などが、どの程度強いことばであるかは知っておいてもらったほうが誤解も避けられる。地域で使われていることばを教えないで、真のコミュニケーションに役立つことばは教えられない。

確かに、方言が方言である理由は、共通語(標準語)がダイグロシア状態として存在し、方言を学ぶ必要性が社会に限定された形で存在するということであった。しかしながら、共通語が日本国内どこへ行っても内容伝達において全く困るということはないということと、地域の一員となっていくこととは違うことである。それぞれに要求されるべき言語の教育が必要であり、それぞれに合った教育内容が考えられるべきである。

なお、岐阜大学共通教育科目へは、少人数ながら毎年外国人留学生の参加も見られる。2006年度受講生からは次のような動機が記されていた。

・日本のいろいろな方言がおもしろいと思って、勉強してみたいです。

留学生の場合、必ずしも必要性が動機となって方言を学ぶというだけではないようである。

### 3.4 まとめ

以上、さまざまな「方言」学習者の学習動機を見てきた。今一度要約しておく。

同一方言話者が「方言」を学ぶ理由としては、自己のアイデンティティの確立や確認といったことがまず挙げられる。学生からは特に他地域との違いについて、学生以外では特に語源などに関心も高く見られる。これらは、ちょうど昨今流行の、日本語ブームと軌を一にする傾向が感じられる。一方、同一方言話者に限定されるわけではないが、同一方言話者であっても強く意識されるのが、教育・医療・介護等におけるコミュニケーションの必要性である。方言が実利的な存在であるとの認識が学習動機となっていることもうかがえる。

一方、異方言話者が、日本語共通語以外に特定方言を学ぶ理由としては、やはり岐阜という地に住むことによる異方言接触が挙げられる。これは日本語を母語としない学習者にも共通した理由となりうるが、日本人の場合、共通語という意味疎通のための道具をもちながら心的距離を縮めるために方言を学習するという動機が強いのに対し、外国人の場合、今回は生の声が十分あつまらなかったが、話しことばとして共通語の代替物として、より身近に有用である方言を学ぶ必要性を感じているということが一般には言えるであろう。

ここで重要なことは、どのような理由が高尚であり低俗であるという評価を与えるべきではなく、多様な学習動機それぞれに学ぶべき「方言」があるにもかかわらず、「方言」に関する研究は、旧来のものが多く、学習やそれによる伝承またはコミュニケーション能力向上による地域社会への受入など、現代だからこそ求められる方略を視野に入れて、「方言」をどう教える(学ばせる)かという観点からの考察があまりおこなわれてこなかったという点である。今後、このような「方言」教育に関する学問、まさに方言教育学は、従来からの基礎的な方言研究に加え、どのような「方言」を学習者が学びたがっているか、また学習による効果を生むかということまで考えながら進めていく必要がある。



#### 4. おわりに～学校教育における「方言」学習への提案

3.1節で示した、小中学校での方言調べがその後の「方言」への関心を大きくしていったという意見は重要である。学校教育での「方言」への関心、ひいては「ことば」への関心は、今、早急にかつ長期的視野に立って進められていくべき学習ではないだろうか。

一方で、小中学校における方言調べの現状は、単に、他の方言、よくあるところでは沖縄や東北といった、遠方の地のことばを「調べてみました」で終わっていることが少なくない。これは、外国語で〇〇を調べてみましたというのと同じレベルである。このような異国趣味的な方言調べには、母語をよりよく知るための足がかりとする観点が欠けている。

今、議論的となっている「愛国心」が、「国」という機関を尊ぶことを意味するのではなく、あるいはそれよりも重要なものとして、生まれた土地を愛するというを捉えれば、まさに、地域人としてのアイデンティティをことばから獲得していくことは、十分に考えられるべきことであろう。他者は自己を反省するために存在するとしても、染まるべき目標として存在するわけではない。学校教育における方言調べは、もっと自らを知るきっかけとなるべきである。そして、自らの郷土に自信を持つこと、これが「共通語＝東京のことば以外は価値の低いもの」⇒「東京以外は価値の低い田舎」という、短絡的かつ浅はかなこの国にはびこった誤謬を、長い間かかっても心の中から是正していくきっかけになるものと信じたい。そのために、教える側の教師も、偏見のない意識と豊富な知識をもって方言教育をおこなわなければならない。

また、今日の教科書で取り上げられている作品における「方言」の使用にも大きな問題がある。「方言」は最初にも述べたように、地域話者があってこそ「方言」である。光村図書小学校5年国語に見られる杉みき子作「わらぐつの中の神様」は、雪国新潟を舞台とした作品であるが、筆者も新潟出身であり、物語の舞台と方言使用とが十分に有縁性を有している。反面、単に田舎らしいからという安直な理由による方言使用や、得体の知れない「変な」方言の使用も、教科書に収められている作品に見られるのは非常に残念なことである。単に金水(2003)の言う「役割語」としてのみ、方言が使用されることは、つい20年ほど前までおこなわれてきた方言撲滅＝共通語礼賛の教育と、内容はさほどかわってはいない<sup>18</sup>。地域ごとにきちんとした地域特有の言語が学べるシステムと教員養成が求められる。

さらに、学校教育で「方言」を考えるときの今日的課題として、外国人児童生徒の問題を無視するわけにはいかない。日本語を母語としない外国人の場合、教科書に書かれている共通語と先生や旧友が実際に話す方言との乖離が、ダイグロシア状況と感じられていることは、あまり学校では意識されていない。教科書に「飛んでいます」と書いてあるのを読んだ直後に、「飛んどるんやて」のごとき言い方で学習を進めるのは、共通語と方言とが児童生徒の中で十分に結びついていることを前提にした教育行為である。外国籍児童生徒は、このような結びつきを一般には十分に有していない。

これに対し、もちろん、教室での方言使用を制限することも一手であるが、それだけでは教室外のことばがまたわからなくなってしまう。教室で方言と共通語を結びつけていく作業を、ことさらに「教える」という行為としておこなわないまでも、常日頃からおこなっていけばよいのではないだろうか。求められているのは、方言だけに限定された手段でおこなわれる教育でも、共通語という外の世界で使われていない別次元のことばでおこなわれる教育でもない。方言と共通語が結びつけられていくことこそ、外国籍児童生徒に対しても地域で育っていくこととして育み、未来を見据えた教育

<sup>18</sup> NHKにも方言使用に関し、二面性がある。2000年から2001年にかけて放送された「ふるさと日本のことば」は、地域の特性を十分に番組に取り入れた比較的良質な番組であったが、最近では、「珍しい」言い方を集めて放送したり他の地域の遊びを子ども向け番組で繰り返し放送したりするような、地域性を破壊する行為も目につく。

がおこなっていけないのではないか。

家庭や地域が成長過程で習得するものとして方言を教える力を失っているとしたら、学校、特に初等教育では、話しことばで野卑なものというレベルより高い意識で、方言を母語として位置付け、学ぶべきものとして学習させていくことを考えなければならない。今、まさにそのようなことを考える時期に来ているのであろう。このような時代であるからこそ、学校の役割、地域の役割などをひっきりめて、あらためて「方言」を教えることをもっとオープンに議論していくために、方言教育学を考えていかなければならない。

#### 【付記】

本考察は、日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (1) 「文法・語彙シラバスに基づいた総合中級日本語教材の作成」(課題番号15520334・代表 高梨信乃(神戸大学))による研究成果の一部である。

#### 【参考文献】

- 浅香武和 (2005) 「ガリシア語」および「アストゥリエス語」坂東省次・浅香武和編『スペインとポルトガルのことば』同学社
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語～役割語の謎』岩波書店
- 工藤進 (1980) 『南仏と南仏語の話』大学書林
- 竹中克行 (2005) 「カタルーニャのカタルーニャ語一言語正常化政策の道程と将来への展望」坂東省次・浅香武和編『スペインとポルトガルのことば』同学社
- ビセンテ・メンチョール&アルベル・ブランチャデル [西山仁美訳] (2003) 「スペインとヨーロッパにおけるカタルーニャ語」京都外国語大学イスパニア語学科編『スペイン語世界のことばと文化』行路社
- 中島由美 (2005) 「セルビア・クロアチア語の生成と解体 —「ユーゴスラビア」の運命とともに—」柴宜弘編著『バルカンを知るための65章』明石書店
- 備前徹 (1991) 「外国人の近畿方言受容意識」『国語学』166
- 備前徹 (1996) 「在日外国人と方言」小林・篠崎・大西編『方言の現在』明治書院
- 村田奈々子 (2005) 「ギリシャ語の二つのかたち—ディモティキとカサレヴサー」柴宜弘編著『バルカンを知るための65章』明石書店
- 山浦玄嗣 (1985) 『ケセン語入門』共和印刷企画センター
- 山田敏弘 (2004) 『みんなで使おっけ! 岐阜のことば』まつお出版
- 山田敏弘 (2006) 「岐阜大学全学共通教育・岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアム共同授業「岐阜県方言のしくみを学ぶ」の問題点と改善の方法」『岐阜大学教育学部研究報告教育実践編』8
- Raymond G Gordon, Jr. (Ed.)(2005) "Ethnologue 15th edition" SIL International